



ごうちゃんねる (GO-CHANNEL)

2021/07/03 公開

■ユダヤ入門シリーズ■

#30 「イスラエル建国の父テオドール・ヘルツル」 中編

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。今日はユダヤ入門シリーズ第30弾！パチパチパチ！
今“現代イスラエル建国の父”と呼ばれるヘルツルに焦点を当てていますが、ヘルツルの生涯は非常に重要です。彼の生涯がシオニズム運動の歴史と被っているからなんです。この人物を3部作で今お届けしていて、今日は第2弾です。

ユダヤ人について、こんなジョークというか諺があります。『ユダヤ人が3人集まれば、4つの意見と5つの政党ができる。』

ユダヤ人はそれぞれ自己主張が強く、自分の意見というのがあって、それを曲げようとしません。和とか一致というものと対極にある。非常に自我が強いというか、俺はこう思う！ということをや非常に強烈にアピールする人たちだと言われています。そうなるように教育しているからですね。それが良い時もあるけれど、裏目に出る時もあるんです。

19世紀、ヨーロッパ中で反ユダヤ主義が再燃します。反ユダヤ主義とはユダヤ人に対する嫌悪感・偏見に基づく抗議行動ですね。この反ユダヤ主義でユダヤ人たちがもう大変な目に遭うんですが、どうやってこれを解決するかについても、ユダヤ人それぞれの立場によって意見が違います。

あるユダヤ人たちは、「ヨーロッパにいなければいいじゃないか。アメリカのような歴史が新しく、移民で出来上がっている国に行ったら、ヨーロッパで受けているような仕打ちを受けずに済むだろう。」現に、アメリカにずいぶん渡って行くんですよ。

「いやいや。ユダヤ人がユダヤ人であることにこだわるから迫害・偏見が消えないのだ。同化したらいいんだよ。いっそのこと、ユダヤ人がキリスト教に集団改宗したら問題解決するんじゃないか」と極端な意見を言う人たちもいました。

ヘルツルが提案したアイデアは非常にシンプルで、「ふるさとに帰ろうよ」という考えなんです。これをシオニズムと言います。「我々はなぜよそ者扱いを受けるのか。よそ者の国にいるからでしょ。自分たちがいたふるさとに戻って、ユダヤ人の国を造って、ユダヤ人がユダヤ人を自治するという形態に持って行ったら解決するじゃない！」これを政治的シオニズム運動と言うんです。

シオニズムは直訳すると、シオン+イズムでシオン主義です。イズムは主義。シオン主義。ではシオンとは何か？ 狭い意味で限定的に使うとエルサレム。エルサレムの別名です。広い意味で使うなら、かつてユダヤ人の先祖たちが住んでいた領土のこと。すなわち、聖書においてユダヤ人に約束されている約束の土地のことをシオンの地、シオンと言うんです。

シオニズムは「かつてユダヤ人の先祖たちが住んでいたところに、子孫である我々が戻って、そこにユダヤ人の自治共同体を造ろうよ。ふるさとに帰ろうよ。」これがユダヤ人問題の解決になるというんです。これが政治的シオニズムです。これを、行動計画が伴う具体的プランとしてユダヤ人に提案した最初の人々がテオドール・ヘルツルです。

彼はこのビジョン実現のために2つのことを行いました。今日はそれをご紹介します。

■ユダヤ民族基金を作った。

今は、良いプロジェクトをやるためのお金集めにクラウドファンディングをやるじゃないですか。当時はそんなインターネットありません。パレスチナに入植するユダヤ人が実際に起こされる必要があるけど、先立つ物が必要です。当時パレスチナはオスマン帝国ですが、そこに入って開拓する移住民・移民農民・開拓民を支援するためのお金を集めたのがユダヤ民族基金です。

この基金を利用して、数年間で数千人の移民が入って行き、いくつかの開拓村ができる。学校もできる。そして、聖書時代に書いてあった作物のいちじくとぶどうを植えて開拓をして行ったんですね。これは決して簡単なことではなかったんです。

時々 パレスチナ問題の解説をされる方の中で、「ユダヤ人は既にあったアラブ人の村を武力で追い散らし、更地にして乗っ取って、そこにユダヤ人の国イスラエルを造った」というような乱暴なメチャクチャな説明する方がいますが、ウソですからねっ！ 違いますからねっ！

そもそもパレスチナは国じゃなかったんです。ここはオスマン帝国の領土だったんです。オスマン帝国の領土の中で開拓するには、まずオスマン帝国の許可がいるんです。オスマン帝国の許可を得た移民たちが入って行って、今度は不在地主から土地を買わないとダメですね。法外な値段につり上げられるのですが、その時ユダヤ民族基金のお金で土地を買いました。

だけど、土地を買ったって、400年間 人の手が入ってない荒地なんです。400年間放置されたまんまの荒地ですよ。もう荒れ果てた所で、そこに入った人たちはマラリア・コレラ・トラホーム、トラホームって目の病気あるでしょ。ほっといたら失明するんですよ。ユダヤ人移民の8割がこの3つの病気で倒れて、結局帰って行きました。残った2割が“石にしがみついても！”ということで、数年で村や学校ができていったのです。

ユダヤ人たちがいちじく畑やぶどう畑を作る。そして村が形になって出来て来る。すると、現地のオスマン帝国の役人がひっきりなしにやって来て、賄賂を要求するんですよ。もうね、やってられないというか、役人に賄賂を渡さないとまともな活動ができない。何のためにここに入って来たのか。賄賂渡すために、ここに入って来たようなもんです。

しかもオスマン帝国のスルタン自身が、「ユダヤ人が村を造っている」というのを聞いた時、反ユダヤ的な政策をちらつかせることで、もっと賄賂を取ろうとする。ようやく形ができ始めたユダヤの開拓村を、命令ひとつで全部没収すると言うんです。そんなことになったら、今まで築き上げて来たものがゼロでしょ。そこで、ユダヤ民族基金を作るだけでは駄目だ。もう1つのことをヘルツルはするんですね。

■ヨーロッパ各国首脳と面会して直談判し、シオニズム運動を理解してもらい、あわよくば支援してもらおうための外交交渉に入る。

まずヘルツルが向かったのはオスマン帝国のトップ、スルタンのアブデル・ハミド。この人物のさじ加減ひとつで、全部没収されるかもしれない。何とか彼に会って、許可・庇護を求めて、発展のための約束を取り付けようと思うのですが、オスマン帝国の、落ちぶれたとはいえトップですよ。無名の元記者上りがなんで会えるんですか。ありとあらゆる伝手を辿って5年がかりで会うんです。この5年間に彼は賄賂せびられる・ゆすられる・口約束だけ先送りにされる。もう たらい回し。

5年待って、ようやくのことでアブデル・ハミドとの接見がかなうんですね。1901年5月のことです。

ヘルツルは調査して、アブデル・ハミドの弱点を知っていました。

実は外国の銀行からの借り入れで莫大な借金を負ってたんです。その返済を矢の催促で求められてた。「はよ金返せ！金返せ！」とずっと言われ続けていることを聞いて知っていたので、こう言ったんです。

「閣下。もし手前どもの願いを聞いていただけるなら、私には閣下のお悩みを解決できる提案があります。もし閣下がユダヤ民族のシオニズム運動を理解してくださって、今後オスマン帝国領のあのパレスチナに1000万ドルの投資を許可してくださるならば、より安い金利の銀行をご紹介します。借り換えできます。今悩みの種となっている銀行と縁を切ることができます。それによって、借金を劇的に軽減できます。そういう銀行をご紹介しますんですけど！」

スルタンは「ええ考えやのう。愛い（うい）奴じゃ。分かった！約束する！」

そしてスルタンは、今借りている銀行と交渉しました。

「ユダヤ人のヘルツルという男がやって来てな、おまえのところの金利よりも劇的に安い金利で貸してくれる銀行あるから、そこから借りるから。おまえらとの付き合いは、もうこれで終わりや！」

「え！スルタン様、ちょっと待ってください！」金づるですからね、銀行にとって。莫大な金になるから。それでヘルツルの提案を盾にして、今まで借りている銀行が金利をガクンと下げたんです。結局借り換えすることなく、莫大な借金の軽減を果たすことができた。ヘルツルのお陰なんですよ。

ヘルツルはスルタンが約束を果たしてくれるのを待ったんです。3年…。反故にされました。

「借金問題解決したんで、おまえ、もう用ないから。」結局何も得ず。

ヘルツルが得たのは、オスマン帝国に貢献したということで勲1等。勲章。宝石がちょっとはめ込んである小さなネクタイピン1本です。

ヘルツルはくじけませんでした。スルタンの次に向かったのはドイツ皇帝ヴィルヘルム2世。

ドイツ帝国とオスマン帝国は良い関係でした。第一次世界大戦もドイツ帝国とオスマン帝国が同盟関係結びますよね。ドイツ帝国はオスマン帝国に影響力を持っているので、それを使ってシオニズム運動成功のためにスルタンを説得してください！

これもありとあらゆる伝手を辿って、ようやく数か月後にドイツ皇帝との面会がかなうんですが、ドイツ皇帝の隣にピターっとくっついている外務大臣がおった。ビューロー。大のユダヤ嫌い。

ドイツ国内のユダヤ人のことが大嫌い。ドイツを苦しめている色んな問題の原因はユダヤ人にある、と思込んでいる人物。このガッチガチの反ユダヤ主義者ビューローが睨みを利かしているんです。

ヘルツルがドイツ皇帝を説得するために調べていた情報を駆使して色々訴えて、皇帝が少し心を開いてグラッと来るかなというタイミングになると、「ユダヤ人、ドイツでなんぼ悪い事して来たと思ってます？」ユダヤ人の悪口言って水を差すんですね。

しかし、非常に紳士的に振る舞ったヘルツルの言動に、最終的にはドイツ皇帝が「分かった。」

実は面会したのはコンスタンチノーブルで、ヘルツルはスルタンと会う前にドイツ皇帝に会っているんです。「近々スルタンと会うことになっているから、この件についてわしから話しておこう。」

「閣下、どうぞよろしくお願ひします。」…約束は反故にされました。

「これが失敗したのは、ビューローがいらんこと言うたからや！」とヘルツルの日記に書いてあります。

それでもくじけなかったヘルツルは、次にどこに行ったか？

当時世界で一番反ユダヤ主義の国に行ったんですよ。どこだと思いませんか？ ロシアですよ。ロシアは昔から反ユダヤ主義の国で、ユダヤ人への迫害が酷かったのですが、特に 19 世紀は酷かった。ロシアのユダヤ人迫害をポグロムと言います。ポグロムはロシア語で“破滅”。ユダヤ人を破滅させる。しかもこれは、自発的に始まったユダヤ撲滅運動なんです。政府がそれを煽るので余計に酷くなる。

1903 年、近代ロシア史上最大級のポグロムがキシニョフで起こりました。ユダヤ人がたくさん虐殺された（確か 4 月だと思えます）1903 年に、ヘルツルはロシア政府の実力者プレーヴェとの単独会見に成功するんですね。プレーヴェは内務大臣なので国内治安の最高権力者です。色々政策を決定する力があつた。

実は、このプレーヴェ自身がポグロムの陰の主役・黒幕なんです。彼が先導してポグロムをやらせている。もうどれだけプレーヴェがユダヤ人嫌いかは、話してたら言葉の端々からにじみ出て来る。ヘルツルは日記で彼のことを「コイツは豹だ。獣だ。ユダヤ人を獲物にして飛びかかって来る豹のような肉食動物、獣だ。」

その人物にシオニズム運動の援助を求める。どんな論理だと思いませんか？ スゴイですよ。「プレーヴェ閣下。あなたはユダヤ人が大問題だと思っておられます。あなたが憎んでいるユダヤ人がロシア帝国の域内にたくさんいます。そのユダヤ人がほとんど、いや全員 1 人もいなくなったら、ロシアにおけるユダヤ人問題は解決するではありませんか。オスマン帝国の皇帝を説得していただけませんか。そのユダヤ人たちを全部引き受ける場所として、オスマン帝国のパレスチナに郷土を造る、共同体の地面を与える、ということに協力することを。」

プレーヴェはユダヤ人大嫌い。大嫌いであるがゆえに心動くんですよ。「分かった。わしから、ロシア政府から、オスマン帝国政府に働きかけてみよう。」約束します。その時、ヘルツルは非常な手ごたえを感じました。今度はうまく行くんじゃないか。ところがしばらくして、コンスタンチノーブルでロシアの外交官がトルコ人に暗殺されたんです。これによって、オスマン帝国とロシアの関係が最悪のところまで落ちていくんですね。だから当然、このシオニズム運動の語りかけ・働きかけなんて、なくなってしまうんです。

ヘルツルは頼れる可能性があれば、0.1%でも可能性があれば、とにかく何でもやってみようと、片っ端から色んな人に会います。なんとカトリック教会のトップ/ローマ教皇にも面会してるんです。「教皇様。ひと言でいいんです。『カトリック教会はシオニズム運動に反対しない』とだけ言わなくてもいいですか。『シオニズム運動賛成』、そんなことはいいんです。『カトリック教会はシオニズム運動に反対はしない』で結構でございますので、そのようにひと言だけ言っていただけませんか。」その時教皇は素っ気なく「ノー。」ヘルツルの計画に協力する思いは微塵もない。「そんなにパレスチナに行きたいのなら、パレスチナのカトリック教会に行ったらどう？ そしたら洗礼授けてあげるから。」

ヘルツルは他にも色んな大臣や国王に会うのですが、口では良いこと言うてくれる。「じゃあ、実際動いてくれますか」と言ったら「いや、まだその時期ではない」とか何とか、約束しても口約束だけで先送り先送りとかね。どこに行ったって協力者がいない。もうどうにも出来ないかと思ったその時に、当時ヨーロッパで、いや世界で最も大きな力を持っていた大国がシオニズムに対して協力的になり、同情的になり、一肌脱いでやろうかと思いついて、ヘルツルの前に姿を現すんです。そして、その大国が彼に画期的な提案をします。

その提案を彼がユダヤ民族の共同体に持って行ったことによって、彼の命が一気に縮んで死んでしまうんです。

いったいどんな話になるんでしょう。長い話になるので、一旦ここで終えたいと思います。続きは次回お届けできたらいいなと思っていますので、ぜひ次回を楽しみにしてください。

それではまた、このチャンネルでお目にかかりましょう。それまで皆さん、お元気で。さよなら！